

## 満百歳 何が目出度い？

中央区・中洲支部 | 川畑 平一郎

昨年12月1日、満百歳になった。敬老の日には内閣総理大臣（岸田文雄様）から立派な賞状と銀杯を頂き、誕生日には市長さんから賞状と祝い金を頂いた。

九大医学部2年生（当時医学部は4年制）になった時、肋膜炎（肺結核）になり1年休学、その後も何回か再発したが、後は遅れずに医師となり Research と眼科臨床の道を進んだ。又12年前は急性心筋梗塞に罹り、幸い処置が迅速に行われ一命を取り止めたが、狭心症を経ずに心筋梗塞になった場合（最近60～70%はこの症例だそうだ）冠状動脈のバイパスが出来ず心筋の1/4は壊死に陥っているため、残りの心筋が真面目に？働いているので生存している。然し百歳以上が鹿児島市だけでも556人（その内男性は67人と少ない）、鹿児島県全体では2,025人（その内男性は216人）、従って百歳も昔程 rare ではない。

一昨年白寿を迎えるにあたり、「白寿（98年の歩み）」というミニ自分史を鹿児島市医報に掲載して頂いた。自分で言うのも烏滸がましいが、Research・眼科臨床（特に白内障手術）共に世界的レベルの事を成したのを自負している。然し百年以上続いた眼科病院を閉院した事、New York市のColumbia University Eye Instituteを去る時、同医学部に建設中の全米一と言われるMedical Research Centerで研究を続けるよう求められていたのに帰国した事、悔やまれる事が多い。その後悔の念を娘に話したら「数多くの患者さんの開眼に尽くしたから良いじゃない」と慰めてくれた。

先日届いた新しい九大医学部名簿を繙くと同級生生存者はいない。鹿児島一中の同級生は関東に4名生存していたが一人になったようだ。七高理乙（旧制高校）の生存者を一昨年までは3人と自分史に書いたが一浪で入学したので私より2年年上の一人（内科医）が小倉市の老人ホームで暮らしており、人間の寿命は百二十歳が限度だからそれまで生きられるかどうか試してみたいなどと言っている。

何故こんなに長生きしているのか不思議だが、昭和20年6月17日の鹿児島市大空襲で足腰の悪い姑を庇って45歳で戦災死した母が護ってくれているのだと思う。

高齢になると死を恐れて死後の世界がどうなるか、何時まで生きられるだろうかなどと悩む人が多い。私は死ぬまでは生きると思い、あの世では私を信頼していた祖父母・両親が温かく迎えてくれると思うと心が休まる。

モチットバツカイ キバイモンソ